

総括・挨拶

湊 長博(京都大学総長)



本日は、第20回京都大学附置研究所・センターシンポジウムに最後までご参加いただきまして、誠にありがとうございました。お楽しみいただけましたでしょうか。京都大学から、6つの研究所・センターの先生方にご登壇いただきましたけれども、実は、京都大学には18もの附置研究所と研究センターがあります。この数は、日本の国立大学の中でも群を抜いて多く、まさに京都大学が研究大学であることを示す典型的な例だと思っております。このシンポジウムは、今申し上げた研究所・センターにおける最先端の研究活動を若い方々を含め、広くご紹介させていただくことを目的に、毎年1回、全国の主要都市を訪れて実施してきたもので、今回でちょうど20回目を数えます。この節目の機会にここ鹿児島島の地で開催できましたことは、誠に喜ばしいことで、特にこれほど多くの若い方々に参加を賜り、改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。心から感謝いたしたいと思います。

今回のシンポジウムのテーマは、『京都大学が提案する未来』となっておりまして、各研究所・センターの教員から実に多彩な分野の研究を発表いただきました。これらの研究はいずれも、これからおそらく私たちが直面するであろう社会課題に関連した重要なものであります。私たちがこの地球という惑星の中で生きていくうえで、複雑性や不確実性を増す様々な課題に答えるべく、並々ならぬ意識や決意を持っていることを感じていただけたのではないのでしょうか。

特に本日は、昼食会の場において、高校生の皆さんが研究者と交流を深められたと伺っております。次世代を担う若い皆さんが、第一線で活躍する研究者と直に対話することで、自身の可能性を広げ、次のステップへ踏み出すきっかけを得られるような貴重な機会になったのではないかと思います。これから大学に進学される方もたくさんいらっしゃると思いますが、大学で学ぶとはどういう意味でしょうか。これは私がいつも本学の学生に話すのですが、大学で学ぶということは、新しい自分を発見する旅であると考えています。高校までの皆さんはまだ本当の自分ではない、しばしば新たな出会いによって自己発見をしていく、ということです。

京都大学は、ご存知のとおり、1897年の創立以来130年近い歴史を持ち、一貫して「自由の学風」という理念のもとその歩を進めてまいりました。教員や学生が自ら考え行動し、本当にやりたい学問、あるいはやるべきだと考える研究を発見して、未知の分野に挑戦していくことを大学が支え続けてきたのです。その中でも京都大学が目指してきたのは、「インベンション」を追求する、ということです。「インベンション」というのは簡単に言えば、新しいことを見つけることであります。最近では「イノベーション」という言葉がよく使われていますけれども、「インベンション」が先に来るべきであろうと思っております。つまり、未知の分野に踏み込み、これまで存在しなかった新たなコンセプトを生み出していく、まさにその知の創造が京都大学の研究の神髄であり、伝統であるわけです。

今日ご登壇いただいた中に、iPS細胞を用いた研究の話題がありましたが、iPS細胞の作製は、それまで生命科学や医学の分野で考えられていた常識に文字通りパラダイムシフトをもたらした

たわけであります。これによって、新しいものが動き出すということですね。また、今日の発表にはありませんでしたけれども、私も長年に亘り研究してきた「がん免疫」という新しい分野があります。これはがんという大きな生物学の領域と、免疫学という領域がある時点で合体して、新しいコンセプトが生まれ、そこから人のがんという非常に困難な病気に対して、新しい治療法が導入されました。すでに世界中でがんに苦しむ多くの患者さんにこの治療が適用されていて、大きな光明をもたらしています。このような新しい発想や発見が生み出されるというのが、京都大学の強みなわけですね。

では、科学的発見はどのようにして生まれるのか。これはセレンディピティと呼ばれるものです。日本語でも「棚からぼた餅」というたとえがありますけれども、これは何の努力もしないで思いがけない幸福に恵まれる、という意味ですね。セレンディピティはそういう意味ではなくて、これはペルシアのおとぎ話に由来する言葉ですが、偶然のチャンスによって幸運をつかみ取る力のことです。つまり、同じ事象が生じて、何も気づかない人もいるかもしれない中で、偏見や思い込みのない自由な心でそれを自分にとっての幸運に変えていくことが重要なのです。

例えば世界初の抗生物質であるペニシリンというのは、たまたま青かびが混入したことから、かびに抗菌物質が含まれていることに気づきを得て発見されたものです。皆さんにもこれから訪れるチャンスを見逃さないで、つかみ取るにより、新しい世界を切り拓いていかれることを願っています。特に今日のシンポジウムを通じて、若い研究者たちの研究から新たなヒントやエネルギーのようなものを少しでも感じていただけたなら、非常にありがたいと思っております。鹿児島には桜島もあり、本当に素晴らしいところですね。京都も 1200 年以上の歴史を誇る文化の都市です。また皆さんと京都でお会いできればうれしく思います。

結びになりますが、本シンポジウムでは鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会、さらに読売新聞社の皆さまにご後援をいただきました。心から御礼を申し上げます。またシンポジウムの実施・運営にあたって、附置研究所・センターを取り纏めている研究連携基盤、中でも今回幹事部局を務めていただいた iPS 細胞研究所の方々に多大なご協力をいただきました。何より、地元の高校生の皆さん、それから市民の皆さんにこれほど多くご参加をいただきましたこと、誠にありがとうございました。これをもちまして、第 20 回京都大学附置研究所・センターシンポジウムを閉会させていただきたいと思っております。皆さん、今日は本当にありがとうございました。